13 有機農業

イギリスに来て楽しもうと思っていたことがひとつある。それは、私の趣味である園芸についてだ。

まず、園芸関係の雑誌を読んでみて、日本の雑誌とは少し雰囲気が違うことに気がついた。日本の雑誌だと、これこれの害虫や病気には、どんな薬をどのくらいの頻度で使ったらよいかということが書いてあるけれども、イギリスの雑誌では、いかに農薬の使用を避けるかが、ていねいに説明されている。

日本にいるときに、子どもにカタツムリを見せようと思って、苦労したことがある。私の子どものころは、カタツムリなど、梅雨時なら何の苦労もなくみつけられた。それが、今では意外に見つけにくい。

５月にイギリスに着いたときに、まず驚いたのは、テントウ虫の多さだ。暖かい日など、50 センチ四方に何十匹というテントウ虫がいたりする。そして、雨の日には、たくさんのカタツムリにお目にかかった。庭に、たくさんの生き物が動きまわっているのだ。テントウ虫の幼虫は、ものすごい量のアブラ虫の卵を食べるというから、これだけテントウ虫がいれば、バラなどを植えていても、アブラ虫の被害は少なそうだ。どの家もバラをたくさん植えているが、あまり消毒をしているようすはない。それでも、ほとんど問題もなく、きれいな花が咲き誇っているのは、こうした天敵の活躍のおかげだろう。

もちろん、気候の違いは大きい。日本のように高温多湿だと、病害虫の被害はどうしても大きくなる。農薬をまったく使わずに花を栽培するのは、たしかにかなり難しい。それを知ってしまうと、スーパーで売っている虫ひとつついていない野菜は、かなり危険ではないかという気がする。それでも、やむをえず、私も花づくりで、いくつかの農薬を注意しながら使ってきた。だが、やなり何かが間違っていたようだ。

イギリスの場合、すぐ近くに家畜がいて、草を食べている。リスは庭の花のつぼみを食べたりしている。ハリネズミは、すっかり減ってしまったそうだが、それでも運が良ければ庭に来るのを見ることができる。日本にいるときに比べて、食物連鎖を身近に体感することができるのだ。そして、園芸雑誌でも、そ

図 1　庭に集まるテントウ虫 (著作権フリー)

れを強調している。雑誌の最近の特集は、いろいろな天敵研究の紹介だ。なかには、「ケラ」を見つけた人は連絡してくれというお願いまでのっている。イギリスでもすっかり「ケラ」が少なくなってしまったが、根切り虫の天敵として飼育したいということのようだ。

どうやら私は、植物の害虫を殺し、病気を治すことに意識を向けすぎてきたようだ。人間でいえば、西洋医学的な方法に頼ってきたことになる。もちろんそれは重要な方法なのだろうが、庭の中にさまざまな生き物があふれ、それが微妙なバランスを保ち、そのバランスの中で植物が健康に育つという、いわば東洋医学的な植物栽培の方法を、少し忘れていたような気がする。害虫を殺すために天敵まで殺してしまって、結局、薬なしでは栽培が難しい状態にしてしまったことが、ないとはいえないのだ。

イギリスから帰ったら、まず、いかにして虫たちを庭に招くかを工夫してみたいと思う。虫の居心地のよい環境は、植物にも悪くはないはずだ。イギリスほどは無理としても、何とかしてテントウ虫を増やして、アブラ虫の薬だけは、少なくとも使わなくてすむようにしたい。そのためには、近所のテントウ虫ハンターの子供たちを、まずなんとかしなければならないという、難問がひかえ

ているのだが ···· 。

1996　新納泉　　著作権フリー